

音順	生薬名	中医の性味・帰経	中医の用量
		中医学生薬解説、参考・使用上の注意 および中医学以外の生薬解説・生薬学解説	
たー2	だいおう 大 黄	苦・寒 脾・胃・大腸・肝・心包	3～12g、煎服。外用には適量。 粉末を吞服するときは、1回0.5～1g。
中医生薬解説			
 <p>ダイオウの根茎</p>		<p>瀉熱通腸 胃腸の実熱積滞による便秘、腹痛、高熱、意識障害、うわごとなどの症候に、芒硝・枳実・厚朴などと用いる「大承気湯」「小承気湯」「調胃承気湯」。</p> <p>大腸湿熱の下痢、腹痛、テネスマスなどに、黄連・黄芩・白芍・木香などと用いる「芍薬湯」。</p> <p>食積の下痢をしてすっきりしない、腹満、腹痛などの症候に、木香・檳榔子・枳実・青皮などと用いる「木香檳榔丸」「枳実導滞丸」。</p> <p>寒積の便秘、腹痛、冷え、脈が沈遅などの症候にも、温裏の附子・乾姜などと用いる「温脾湯」「大黄附子湯」。</p> <p>清熱瀉火・涼血解毒 火熱上亢による目の充血、咽喉の腫痛、歯痛あるいは血熱妄行による鼻出血、吐血など、上部の火熱の症候に、黄芩・黄連・山梔子などと用いる「三黄瀉心湯」「涼膈散」「当帰竜薈丸」。</p> <p>腸癰（虫垂炎など）に、金銀花・連翹・牡丹皮・桃仁などと用いる「大黄牡丹皮湯」「關尾化癰湯」「關尾清化湯」「關尾清解湯」。</p> <p>癰腫疔瘡（皮膚化膿症）にも、野菊花・蒲公英・連翹・金銀花などと用いる。</p> <p>熱傷や皮膚化膿症に、単味で、あるいは地榆と共に粉末にして油で調製し外用する。</p> <p>行瘀破積 血瘀による無月経や産後瘀阻の腹痛に、桃仁・紅花・麩虫などと用いる「下瘀血湯」。</p> <p>打撲外傷による腫脹、疼痛に、桃仁・紅花・穿山甲・乳香・沒薬などと用いる「復元活血湯」「治打撲一方」「通導散」。</p> <p>清化湿熱 湿熱の黄疸に、茵陳・山梔子などと用いる「茵陳蒿湯」。</p> <p>水熱互結の結胸による心窩部～下腹部が硬く脹って痛む、発熱などの症候には、芒硝・甘遂などと用いる「大陷胸湯」。</p> <p>腸間の水気（腹水）による腹満、便秘、尿量減少などに、椒目・防己・葶藶子などと用いる「己椒藶黄丸」。</p>	
		<p>参考 生用（生大黄）すると瀉下の力が強く、酒をふきかけ火で焙る（酒洗大黄）と上部の火熱を清すると同時に活血行瘀の効能が強くなり、酒と共に黒色になるまで蒸す（製大黄）と瀉下の力が緩やかになって清化湿熱の効能が強くなり、炒炭（大黄炭）すると化瘀止血に働く。</p> <p>「方剤決定のコツ」によれば、酒に浸して用いるのは、大承気湯・抵当湯の場合で、この場合の大黄は、酒に浸した後乾燥して備蓄して置いてよい。</p>	
<p>使用上の注意 瀉下の効果を得るためには、長時間煎じてはならない、後下する。峻烈な攻下破瘀の薬物であるから、実証でなければ、みだりに使用してはならない。妊婦、月経期、哺乳期には禁忌あるいは慎重を要する。</p>			
中医以外の生薬解説			
神農本草経		味苦寒、瘀血血閉を下し、寒熱を主どり、癥瘕積聚留飲宿食を破り、腸胃を盪滌し陳きを推し新しきを致し、水穀を通利し中を調へ食を化し五臓を安和することを主どる。	
薬 徴		結毒を通利することを主どる。故によく胸満、腹満、腹痛及び便閉、小便不利を治し、旁ら発黄、瘀血、腫膿を治す。	
新古方薬囊		裏に熱ありて、大便出でず便秘し又は下利するを治す。又腹痛、腹満を治す。或は内に熱あり、胃に痞えありて吐する者を治す。或は頭痛する者を治す。 大黄 の行く所は内に熱あるが主なれば、小便の色濃く、口中燥き又は眼の中赤き者等多し。	
		<p>「方剤決定のコツ」の注釈</p> <p>神農本草経、薬徴、新古方薬囊の大黄の解説を全て考え合わせれば、気味からは苦寒であるから血の熱を取り、胃熱による上衝を下し、内熱を治するので、これらによって起こる全ての症状（手足、身体が熱く、小便の色が濃く、目が赤いなど）に用いられる。裏寒とか虚熱（顔が赤かったりする）の人には間違っても用いてはならない。</p>	